



(公財) 山階鳥類研究所
 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
 電話：04-7182-1101 FAX：04-7182-1106
<http://www.yamashina.or.jp>



小笠原諸島のアホウドリ繁殖地が 80年ぶりに復活したことを論文発表しました

- 山階鳥類研究所は、日米政府との共同プロジェクトとして、アホウドリの未熟なヒナ70羽を伊豆鳥島から小笠原諸島の^{むごじま}聳島に移送し、現地で人工飼育して巣立たせることにより、1930年頃に失われた小笠原諸島のアホウドリ繁殖地の復活を促す取り組みを進めてきました。その結果、小笠原諸島で80年ぶりに繁殖が成功し、ヒナが誕生しました。
- 成果を評価するため行ったモニタリング調査の結果、最初の移送の年から8年後までの間に、飼育個体の39% (27羽) の帰還が聳島で確認されましたが、そのうち67% (18羽) は伊豆鳥島でも確認されました。飼育個体の繁殖は、聳島および近隣の島^{なこうどじま} (媒島) では少なくとも2番い (計2ヒナ誕生)、伊豆鳥島では5番い (計9ヒナ誕生) が確認され、その番い相手はいずれも野生個体でした。現段階では、出生地である伊豆鳥島に戻り、繁殖を行う飼育個体の方が多いう状況となりましたが、それでも、小笠原諸島における80年ぶりのヒナの誕生は、本プロジェクトがもたらした貴重な成果です。
- 本成果は2016年11月28日にロンドン動物学会の学術雑誌「Animal Conservation」オンライン版に掲載されました。

※ 本プロジェクトは山階鳥研が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金、朝日新聞社等の支援を得て進めています。

1. 背景と目的

個体を人為的に導入することによって繁殖地を復元・創成する試みは、野生動物の保全に有効な手段と半ば盲目的に信じられてきました。そのため、この試みの実施例は、市民活動としての普及も相まって急速に増えています。しかし実際のところ、その成果の評価に不可欠な事後調査の結果報告は、導入例に比べて極めて少ないのが実状です。本論文の著者らは、噴火のおそれのある伊豆鳥島から、過去に失われた繁殖地で現在は安全な小笠原諸島の聳島に未熟 (約1ヶ月齢) なヒナを運び、3ヶ月間の人工飼育を経て巣立たせる試みを5ヶ年 (2008-2012年) 行った後の、アホウドリの飛来・繁殖状況について調べました。

2. 成果と意義

聳島を巣立った飼育個体は、初移送の3年後から聳島に帰還し始め、8年後までの間に全体の39% (27羽) が確認されましたが、そのうち67% (18羽) は伊豆鳥島でも確認されました。飼育個体の出現頻度は、いずれの年においても、聳島 (平均: 0.3-2.3羽/日) より伊豆鳥島 (0.4-3.5羽/日) の方が高い値を示しました。飼育個体の繁殖は、初移送の5年後から始まり、8年後までの間に聳島および近隣の島 (媒島: 聳島から7km南) では少なくとも2番い (計2ヒナ誕生)、伊豆鳥島では5番い (計9ヒナ誕生) の繁殖が確認されました。飼育個体の番い相手はいずれも野生個体であり、聳島は尖閣諸島由来の個体、媒島は伊豆鳥島由来の個体が番い相手でした。さらに、初移送の8年後には、^{よめじま}嫁島 (聳島から22km南) でもアホウドリのヒナ1羽 (親個体は未確認) が確認されました。聳島での繁殖はデコイと音声装置によるアホウドリの集団繁殖地を模した環境で行われましたが、近隣の島での繁殖は近縁ながらも別種のクロアシアホウドリの集団繁殖地で行われました。

聳島を巣立った個体の飛来・繁殖状況がいずれも伊豆鳥島の方が高かった結果は、成育地の刷り込みよりも、出生地の刷り込みや、同種集団がもたらす社会的誘引の強さ（伊豆鳥島のアホドリ：750 番い）が、アホドリの繁殖地選択にとってより重要な役割を果たすことを示唆しています。とはいえ、アホドリが居ない場所でも繁殖は始まっており、近縁種集団（媒島・嫁島のクオアシアホドリ：ともに 400-500 番い）もまた大きな効果を持つと考えられました。

現段階では、出生地である伊豆鳥島に戻り、繁殖を行う飼育個体の方が多い状況となりましたが、それでも、小笠原諸島における 80 年ぶりのヒナ誕生は、本プロジェクトがもたらした貴重な成果です。本プロジェクトは、地球温暖化にともなう海面上昇などによって繁殖地消失の危機を抱える他のアホドリ科鳥類にとっても、重要なロールモデルとなるに違いありません。

3. 掲載情報

タイトル：Translocation and hand-rearing of chicks result in short-tailed albatrosses returning to breed in Ogasawara Islands 80 years after extirpation

著者：出口智広¹・佐藤文男¹・江田真毅²・泉洋江²・鈴木創³・Robert M Suryan⁴・Ellen W Lance⁵・長谷川博⁶・尾崎清明¹（¹山階鳥類研究所・²北海道大学総合博物館・³小笠原自然文化研究所・⁴オレゴン州立大学・⁵米国魚類野生生物局・⁶東邦大学）

掲載雑誌：Animal Conservation DOI: 10.1111/acv.12322

掲載日：2016 年 11 月 28 日

4. 本件についての問い合わせ先

論文執筆責任者（プロジェクト担当者）：山階鳥類研究所 研究員 出口智広

Tel: 04-7182-1107, Fax: 04-7182-4342, E-mail: deguchi@yamashina.or.jp

プロジェクト責任者：山階鳥類研究所 副所長 尾崎清明

Tel: 04-7182-1107, Fax: 04-7182-4342, E-mail: ozaki@yamashina.or.jp

広報担当者：山階鳥類研究所 広報主任 平岡考

Tel: 04-7182-1101, Fax: 04-7182-1106, E-mail: hiraoka@yamashina.or.jp

5. 図、写真等

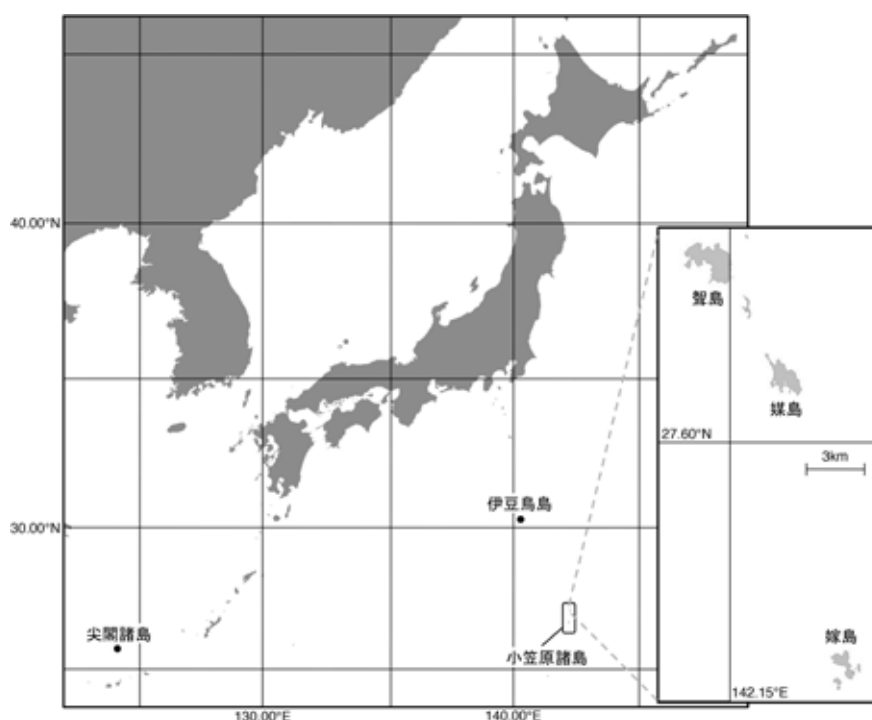


図 1. 本プロジェクトの対象地域



図 2. 2016 年 2 月に小笠原諸島聳島で確認されたアホウドリの親子

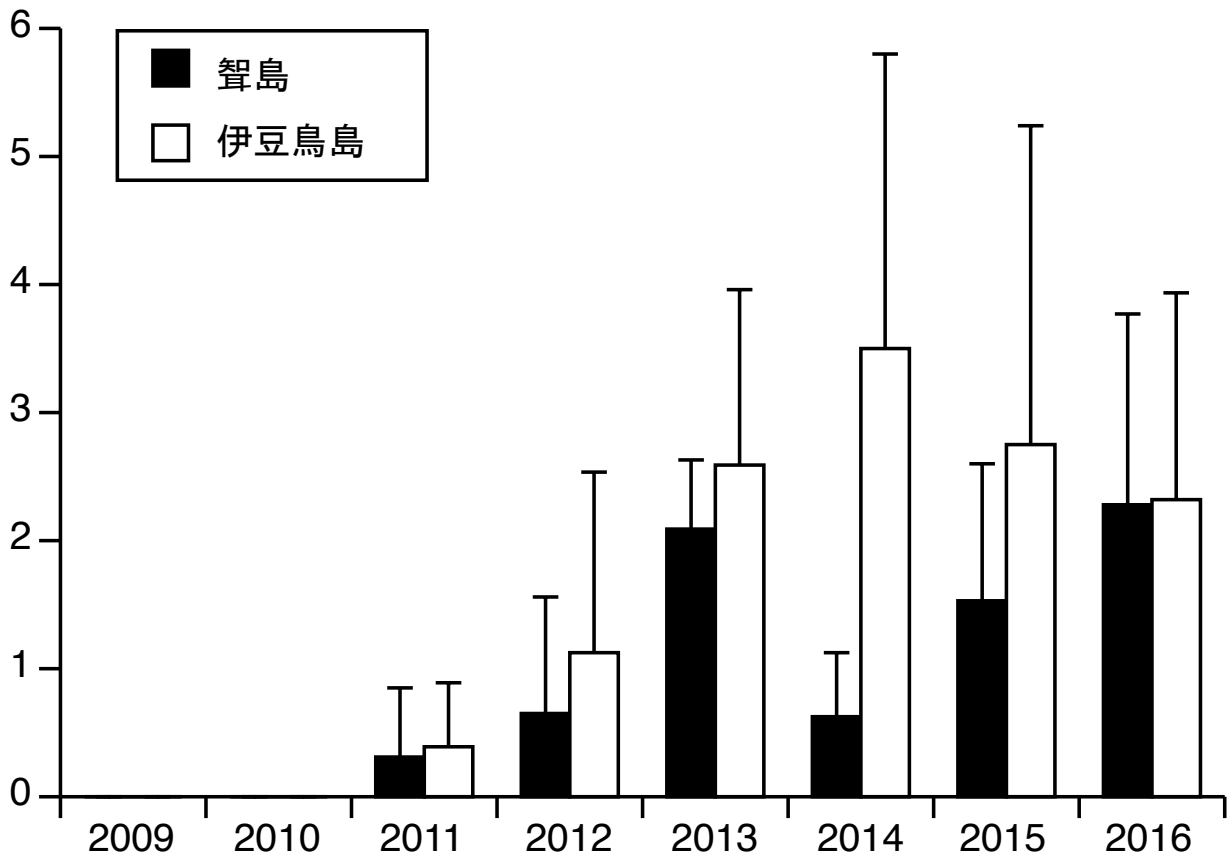


図 3. 聳島を巣立った飼育個体が聳島、伊豆鳥島で確認された個体数
(1 日当たりの平均個体数と標準偏差)

<参考>

アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科

特別天然記念物

国内希少野生動植物種 (種の保存法、1993年指定)

絶滅危惧Ⅱ類 (環境省レッドリスト 2012)

分布及び個体数

- ・繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島と尖閣諸島
- ・非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・保全上の成果などもあり、現在個体数は約4,000羽 (尖閣個体群は除く) まで回復したと推定されている。

形態及び生態

- ・成鳥は全長が84～94cm。
- ・成鳥は全体に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～8年かかる。
- ・繁殖期は10月～翌年5月。
- ・巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

アホウドリの小笠原再導入

現在、アホウドリのふたつの繁殖地のうち、伊豆諸島鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所で繁殖地復活を急ぎ促すことが、本種の復活を一層確実にするために望ましいと考えられた。このために山階鳥研では、生まれた場所に戻って繁殖する同種の習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島智島にアホウドリの繁殖地を作ることとした。2008年から2012年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から智島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。智島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体 (カラーリング番号Y01、雄) と野生個体 (尖閣諸島由来、雌) の間に初めて産卵が確認された。このプロジェクト開始後に小笠原諸島で確認されたアホウドリの繁殖例として、下記の3例がある。

- (1) 小笠原諸島媒島 2009年に巣立った個体 (カラーリング番号Y11、雌) と野生個体 (鳥島生まれ) との間のヒナが2014年5月に確認。
- (2) 小笠原諸島嫁島 5月9日に巣立ち間近のヒナを確認。親鳥は不明だが、山階鳥研がこのプロジェクトで飼育し、巣立たせた個体あるいは、このプロジェクトにともなって誘引された野生個体の可能性がある。
- (3) 小笠原諸島智島 2008 (平成20) 年に巣立った個体 (カラーリング番号Y01、雄) と野生個体 (尖閣諸島由来、雌) との間のヒナの巣立ちが2016年5月14日に確認。

なお、小笠原諸島での今回の繁殖以前の、もっとも最近の信頼できる繁殖についての報告は、「小笠原諸島並に硫黄列島産鳥類に就て」(柗山徳太郎, 1930. 日本生物地理学会会報, (1): 89-186.) に繁殖地として、「小笠原諸島：北之島、西之島」とある記述である。